

決定

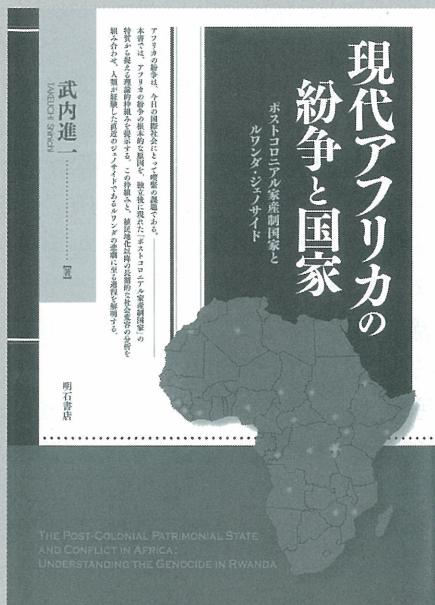
第13回

「国際開発研究 大来賞」

主催：財団法人 国際開発高等教育機構（FASID）

「国際開発研究 大来賞」は、多様化する国際開発のニーズに対応し新たな指針を提示する研究を奨励するため、当財団の初代評議員会会長を務められた元外務大臣 大来佐武郎氏を記念して、平成9年に創設されました。

第13回の受賞作品が下記の通り決定いたしましたので紹介します。



武内 進一 著

『現代アフリカの紛争と国家』

—ポストコロニアル家産制国家とルワンダ・ジエノサイド

(明石書店) 2009年

これまでの受賞作品

- 第1回 廣瀬昌平・若月利之編著『西アフリカ・サバンナの生態環境の修復と農村の再生』農林統計協会 1997年
原 洋之介著『開発経済論』岩波書店 1996年
- 第2回 絵所秀紀著『開発の政治経済学』日本評論社 1997年
深川由起子著『韓国・先進国経済論—成熟過程のミクロ分析—』日本経済新聞社 1997年
- 第3回 中兼和津次著『中国経済発展論』有斐閣 1999年
辻村英之著『南部アフリカの農村協同組合—構造調整政策下における役割と育成—』日本経済評論社 1999年
- 第4回 峯 陽一著『現代アフリカと開発経済学 市場経済の荒波のなかで』日本評論社 1999年
- 第5回 黒崎 卓著『開発のミクロ経済学』岩波書店 2001年
西川 潤著『人間のための経済学—開発と貧困を考える』岩波書店 2001年
- 第6回 石井正子著『女性が語るフィリピンのムスリム社会』明石書店 2002年
脇村孝平著『飢餓・疫病・植民地統治—開発の中の英領インド』名古屋大学出版会 2002年
- 第7回 平野克己著『図説アフリカ経済』日本評論社 2002年
- 第8回 石井菜穂子著『長期経済発展の実証分析』日本経済新聞社 2003年
安原 豪著『メキシコ経済の金融不安定性』新評論 2003年
- 第9回 藤田幸一著『バングラデシュ農村開発のなかの階層変動：貧困削減のための基礎研究』京都大学学術出版会 2005年
- 第10回 谷 正和著『村の暮らしと砒素汚染—バングラデシュの農村から』九州大学出版会 2005年
- 第11回 湖中真哉著『牧畜二重経済の人類学—ケニア・サンブルの民族誌的研究』世界思想社 2006年
- 第12回 牧田りえ著『Livelihood Diversification and Landlessness in Rural Bangladesh』The University Press Limited 2007年

武内 進一 著

『現代アフリカの紛争と国家

—ポストコロニアル家産制国家とルワンダ・ジエノサイド』

(明石書店)

審査委員選評

本書は現代アフリカ紛争の根源を探求した著者・武内進一氏の集大成ではないかと思う。筆者は対アフリカ援助がクローズ・アップされた時、混迷のアフリカ社会の歴史的な実像を勉強しようと手にしたのが「現代アフリカの紛争—歴史と主体」(武内進一編、アジア経済研究所)であった。また、紛争予防外交を調べた時には「アフリカの国内紛争と予防外交」(NIRA・横山洋三共編、国際書院)を参考にした。この時も武内氏は第4章予防外交の新たな展開で第2節と第3節を執筆している。その他、多くのアフリカ研究会でもルワンダをベースに紛争の根元をみつめた報告を行っている。今回は、これまでの研究をベースに一つの研究の型にまとめあげたと言えそうだ。

たとえば、本書はアフリカにおける紛争は主体が国家の軍隊ではなく民兵など小さな単位になっているため、被害は市民に集中するといった既存の理論があるが、それら理論とルワンダの事例を組み合わせながら、さらになぜそのような状況が生じているのかを絶妙に描いている。既存の理論はアフリカの社会を単純化して描きがちであったが、本書においてはアフリカ社会の複雑さをより詳細に明確化している。そして既存の理論について、当たり前と思っていた点について、一つ一つあらためて考察し直している。それにより、新たな視点をいくつも呈示しており、通説をそのまま鵜呑みにするのではなく、極めて多様な視点を持って、アフリカを捉える必要性を感じさせてくれる。

さまざまな理論が活用されていることもさることながら、特に、ルワンダに関する極めて詳細で具体的な情報には驚かされた。巻末にはインタビューの資料や調査の際の写真が掲載されており、実践的な応用にも期待でき、本書で提示されている情報そのものの価値も高いであろう。さらに強調すべきは、随所に図を活用しながら、それぞれが非常にわかりやすく解説されている。また、本書は400ページを越える大作であるが、歴史や社会構造を説明する上でも、残された文献や人々の声を引用しながら描かれ、ページ数を感じさせないほど、読み物としても非常に魅力的なものになっている。

本書以外、戸堂康之氏の「技術伝播と経済成長」、本台進氏・新谷正彦氏共著の「教育と所得格差—インドネシアにおける貧困削減に向けて—」も大変高く評価でき、最終的な受賞作品を選ぶ際、至難であった。しかし本書は、今後の平和構築に向け大いに活用できる本として普及が進む可能性が高く、またその願いを込めて、受賞への推薦を後押しした。

(株式会社国際開発ジャーナル 代表取締役 荒木光弥)

第13回応募作品の傾向と選考経緯

2008年4月から2009年3月までに出版された開発援助を含む国際開発の分野における課題を主たるテーマとした日本人が執筆した日本語及び英語の研究図書を対象として公募したところ、31件の応募があった。

本年度の応募作品の特徴としては、経済関連(金融、政策、分析等)のものが多く12件に上った。その他の応募作品については、国際協力関連の作品が6件、開発を様々な視点(農村・教育・環境・ジャーナリズム等)から分析した作品が4件、政治関連(平和構築等)のものが3件、地域研究が3件、経営関連(CSR等)の作品が2件であった。また地域別に見ると、例年のようにアジア諸国に関する文献が多く11件あり、特に最近注目されている中国やインドに関する作品が6件と目立った。

当財団内部で予備審査を行った結果、受賞作品に加え、下記5件が最終審査に残った。

黒崎 卓著

『貧困と脆弱性の経済分析』 勁草書房

戸堂 康之著

『技術伝播と経済成長』 勁草書房

本台 進・新谷 正彦共著

『教育と所得格差—インドネシアにおける貧困削減について』 日本評論社

三井 久明・鳥海 直子共著

『よくわかるマイクロファイナンス—新たな貧困削減モデルへの挑戦』 DTP出版

余語 トシヒロ・佐々木 隆共著

『地域社会と開発—東アジアの経験』 古今書院

最終審査で審査委員から出された意見は、おおよそ以下のとおりである。

黒崎氏の作品は、様々なアプローチを踏襲し、途上国の貧困と脆弱性の実証分析をすると共に、現実の貧困削減政

策に有効な政策的含意を明らかにするため、学術的及び実践的価値の高い研究成果であり、今後の貧困分析への貢献が期待される。戸堂氏の作品は、途上国の経済発展にとっての技術伝播の重要性に着目し、高度な計量手法を用いた理論的且つ実証的に分析している。国際水準の学術的研究であり、重要なファインディングを含む、経済成長理論を研究するものにとって貴重な文献である。本台氏・新谷氏の作品は、インドネシアの貧困や所得格差が生じるメカニズムについて、労働分配率や教育の観点から包括的に且つ非常に丁寧に分析していく、理論的な内容と共に教育プログラム実施の際の実践上の示唆も得られる、価値ある研究成果である。三井氏・鳥海氏の作品は、貧困に対しマイクロファイナンス(MF)がどのように機能するのかをケーススタディーを踏まえ分かり易く描いている。MFに関する文献が多数ある中、本研究ほど幅広い情報を集大成しているものは他に見られず、幅広い読者が利用し裨益するだろう。余語・佐々木両氏の作品は、日本、中国、韓国の農村社会構造を比較史的に分析し、自立的且つ持続可能な発展の原動力は農村社会の内在的発展であり、またその鍵を握るのが農村の自治管理機構にあるという視点がユニークで、文献的価値が高い。

武内氏の今年度受賞作品は、1990年代アフリカの紛争を「ポストコロニアル家産制国家」という概念で、歴史的且つ構造的に分析し、さらにルワンダで起きたジェノサイドを事例として仮説検証が試みられている、学術的、実践的価値が共に高い大変な労作である。植民地時代以前からの情報量が豊富であり、先行研究を広範囲に網羅しつつ、それを文章に良く纏めていて大変読みやすい。1990年代以降のサブサハラアフリカ全般について理解を深める上で有益であり、また実務者や研究者を含む、開発と国家権力の問題に関心をもつ幅広い人々にとって得るところの大きい一冊となるだろう。

受賞者の言葉

この度は、栄誉ある賞をいただき、喜びとともに、文字通り身の引き締まる思いです。選考委員の先生方、そして本書の出版にあたってお世話になった皆さまに心から御礼申し上げます。

1986年にアジア経済研究所に入り、中部アフリカ仏語圏諸国を担当せよと言わされたとき、私のなかに開発という問題意識はありませんでした。当時、自分は地域研究者であって、地域研究は開発研究と違うものだと考えていたように思います。赴任したコンゴ共和国で内戦に遭遇し、研究の軸足を紛争問題に移してからも、自分が開発研究をやっているという意識はそれほどありませんでした。

しかし、紛争問題について本格的に勉強するなかで、それが開発をめぐる諸問題と密接に関連していることを強く認識するようになりました。平和構築や紛争予防は、今日疑いなく開発の重要な柱です。紛争を経験した社会にいかにして平和を確立すべきかを考えるために、紛争の原因を理解しなければなりません。そのためには、その国や地域の社会構造や歴史を踏まえる必要がありますが、そこでは地域研究の視点が不可欠です。開発研究と地域研究は対立的なものではなく、大きく重なり、互いに互いを必要とする研究領域なのだと、今は考えています。したがって、今回、「国際開発研究」という言葉が冠された大賞をいただけたことは本当に嬉しく思います。

翻って、自分の著作を読み直してみると、不十分なところ、これから勉強せねばならないところばかりが目につきます。紛争理論の先行研究に関する分析が甘いですし、今後はルワンダと他の国とを比較したい。紛争が起こった国はもちろんですが、例えばガーナのような、紛争を経験することなく民主化の経験を深めているアフリカ諸国との比較は重要だと考えています。今回の受賞は、これからしっかり勉強しなさいという励ましと受け止めております。その叱咤に応えるべく、努力していきたいと存じます。

(武内 進一)



著者略歴

武内 進一 1962年兵庫県生まれ。1986年東京外国語大学外国語学部フランス語学科卒業後、アジア経済研究所に入所。コンゴ共和国、ガボンで在外研究(1992~94年)を行う。アフリカ研究グループ長を経て、2009年4月より国際協力機構(JICA)研究所に出向中。現在、JICA研究所上席研究員。東京大学博士(2008年、学術)。

主要著書 『戦争と平和の間—紛争勃発後のアフリカと国際社会』(編著、2008年、アジア経済研究所)
『朝倉世界地理講座12 アフリカII』(共編著、2008年、朝倉書店)
『朝倉世界地理講座11 アフリカI』(共編著、2007年、朝倉書店)
『国家・暴力・政治—アジア・アフリカの紛争をめぐって』(編著、2003年、アジア経済研究所)
『現代アフリカの紛争—歴史と主体』(編著、2000年、アジア経済研究所)

表彰式および記念講演会

表彰式及び記念講演会

日 時 2009年12月22日(火) 午後3時~4時

場 所 財団法人 国際開発高等教育機構 5F 第1研修室

参 加 費 無料

申し込み お名前、ご所属先名、お電話番号、E-mailを添えて下記お問い合わせ先までご連絡ください。



審査委員会

●審査委員長●

川上 隆朗 FASID 理事長

●審査委員●

浅沼 信爾 (一橋大学 国際・公共政策大学院 客員教授)、荒木 光弥 (株式会社国際開発ジャーナル社 代表取締役)、
大来 洋一 (政策研究大学院大学 客員教授・アカデミックフェロー)、河野 善彦 (財団法人才イスカ 事務局上席顧問)、
廣野 良吉 (成蹊大学 名誉教授)、伊藤 誠 (FASID 専務理事)、
大塚 啓二郎 (FASID 連携大学院プログラム・ディレクター)、
湊 直信 (FASID 国際開発研究センター 所長代行)

●お問い合わせ先●



財団法人 国際開発高等教育機構 国際開発研究センター 林、高橋

〒102-0074 東京都千代田区九段南1-6-17 千代田会館5階

TEL : 03-5226-0306 FAX : 03-5226-0023 URL : <http://www.fasid.or.jp> E-mail:okita2009@fasid.or.jp